明治・大正・昭和・平成――交悠録

新しい〝日本円〟の「顔」で、～日本再生と経済の立て直しを～

本誌主幹　大中吉一

財務省と日本銀行は、２０２４年７月３日に新札を発行することになります。

紙幣の図柄として登場する肖像は、一万円札が現在の福沢諭吉から渋沢栄一へ、五千円札は樋口一葉から津田梅子へ、千円札は野口英世から北里柴三郎へと変更されることになります。

渋沢栄一翁

新札が発行される大きな理由は、紙幣の偽造を防ぐためと言われていますが、せっかく〝日本円〟の「顔」が全面的に変更されるのですから、これを機に停滞する日本経済を再構築し、極端な円安を是正しなければならないのではないでしょうか。日米の金利差や金融緩和政策の違いもさることながら、日本の誇った技術力や開発力を見直し、さらに国家として自立できる産業力を、基盤となる一次産業から再構築していく必要があるのではないでしょうか。

新・一万円札に登場する渋沢栄一は、ご承知の通り、幕末に生を受け、明治・大正・昭和を駆け抜けた実業家で、５００を超える企業の設立や運営に関わったとされ、「近代日本経済の父」あるいは「日本資本主義の父」と呼ばれている人物です。また実業界だけでなく、６００を超える社会・教育事業にも深くかかわった人物で、その足跡は日本全国に残されています。

今回は、その渋沢翁の足跡をたどりながら、今の日本に求められている〝変革〟あるいは〝改革〟を探り、改善すべき点を掘り下げてみたいと思います。

初めて銀行を設立し日本経済の礎を築いた

渋沢栄一が生まれたのは武蔵国榛沢郡血洗島村（現在は深谷市血洗島）で、農家でしたがもっとも家格の高い名主の家に生まれました。江戸15代将軍慶喜に仕え、明治維新以降は明治政府の一員として大蔵省を牽引し、江戸時代鎖国であった日本が海外と渡り合っていくためのさまざまな改革を推進したのは既に広く知られています。

その時代の功績の１つが〝紙幣〟の発行でした。そう考えると、今回の一万円札への登場は遅すぎたとさえ思えますが、今こそ改革が必要な日本にとっては絶好のタイミングなのかもしれません。渋沢栄一は紙幣に限らず、戸籍や出納の基盤づくりにも深く関与し、云わば近代日本の基盤づくりに官僚として関与してい

たと言えるでしょう。

その渋沢栄一は、大蔵省を退官すると、明治6年（1873年）7月20日に、日本初の銀行である「第一国立銀行」を創設します。これが現在の「みずほ銀行」の原点なのです。その背景にあったのは、日本経済が世界に伍して発展していくためには産業に対する融資が欠かせないと考えていたためで、名称に〝国立〟とありますが、実際には民間企業であったことも見逃せません。

さらに明治11年（1878年）には、現在の東京証券取引所の前身となる日本で初めての公的取引所「東京株式取引所」を創設。

渋沢栄一は日本経済に銀行制度と株式会社制度を普及させ、現在の経済の礎を築いたのです。

そうした渋沢栄一の功績の背景にあるのが、江戸時代に将軍一橋慶喜直属の家臣として訪れた「パリ万博」です。

渡欧するとヨーロッパ各国を視察。先進諸国の社会を広く学び、日本がいかに遅れているかを痛感し、同時にこの技術や知識を日本に持ち帰ることになったのです。

その成果の1つが、「度量衡」です。

それまでばらばらであった計量の単位を統一し、租税や貨幣、土地制度などを確立するための計量に用いる長さや体積、重さの基準を公に定めたのです。

経営者として最初に着手したのが、製紙会社でした。紙は当初ほとんど輸入されていましたが、日本経済の発展のためには良質で安価な紙は必要不可欠であり、品質が高く安価な紙を国産化することは必至と考えたからでした。明治8年（1875年）に現在の東京都北区に「抄紙会社（現在の王子製紙）」の工場が完成し、いよいよ渋沢栄一の実業家としての歩みが始まったのです。

青い目の人形は渋沢外交のシンボル

それから500社以上の企業の立ち上げに関わり、事業を軌道に乗せてきた渋沢栄一は、もちろん財界のトップとして君臨することになりました。〝西の五代友厚、東の渋沢栄一〟と言われた時代です。

しかし、渋沢栄一は事業によって得た利益や名声にはあまり興味はなかったといいます。

明治42年（1909年）に70歳となった頃には、およそ60社もの事業や団体の役職を辞めていたといいますが、大正5年（1916年）、77歳になったのを機に実業界から身を引いてしまいました。

それ以降、渋沢翁は社会貢献活動に力を入れていくことになります。

その1つは、現在「東京都健康長寿医療センター」となっている「養育院」です。渋沢翁は、社会的弱者に眼差しを向け、救済に力を注いでいくのです。

そうした渋沢翁の活動のきっかけとなったのが、明治42年（1909年）の「渡米実業団」でした。渋沢栄一が団長となり、東京・大阪など6大都市の商業会議所を中心とした民間人50名を率いて、3ヵ月間にわたり米国の主要都市を訪問。日本初の大型ビジネスミッションとなりました。

折しも、明治期の後半、日本と米国の関係は徐々に悪化。米国では日系移民の排斥運動が行われるようになりました。渋沢翁は米国との関係改善を強く望んでいたといいます。

渡米実業団には、海外産業などを吸収する面もあったでしょうが、同時に民間外交の側面があったのです。

昭和2年（1927年）、日米の親善を願って米国からは約1万2000体の青い目の人形が、日本からは日本人形が太平洋を越えて両国に贈られました。

その際、日本側で人形の受け入れに尽力したのが渋沢翁でした。

第2次大戦後、忘れ去られていた青い目の人形ですが、昭和48年（1973年）頃から各地で保存されていることがわかり、現存しているのは全国で約330体といわれています。

渋沢栄一の肖像を移した新一万円札と、その平和外交の象徴である青い目の人形。

不穏な戦争の影が忍び寄る世界情勢の中、渋沢翁の世界平和外交の志を継ぎ、日米に留まらず世界の親善を推進し、さらに新しい「日本円」の〝顔〟として登場する渋沢栄一の遺志を継いで、いまこそ日本の産業力再興と日本経済の再生を願って止みません。